



今月の市民コラム
は、言葉の大切さに関
するお便りです。



「言の葉」

植田 笑さん(弥生町)

「人を誹ると口にくる」と、在りし日の母が口癖のように唱え、戒めていた言葉を胸の奥に秘め、生涯の宝物として大切に納めている。

対人関係の掟とし厳守に心がけ、実践している。自分なりに考えてみると、誹った時点で「壁に耳あり」、直ちに空気感染して相手に伝わるは必定。と同時にブーメラン化して災いとなり、我が身に返ってくる定儀づけているので、「禁言」として弁え、弾む対話の流れで同調を避け、感情を害せぬように心がけ、穏便に話題を逸らす事にしている。

何気ない一言が相手を傷つけ、憎悪の念を抱かしめることは言うに及ばず、相手を気配り、良かれと思つて言った一言が、聞くほうは十人十色。外形はもちろん、思考力、思想ともに異なり、受け止め方も千差万別である。

是非かは測り知れないが、身近な者や親類、友情も崩壊するのではなからうか。相手を深く思慮し、親

切で言ったとしても、受ける側は煩わしく、いらぬ世話で用件次第では却って迷惑かもしれない。「小さな親切、大きなお世話」という言葉を耳にしたことがある。高齢で、それにも増して障害を伴う私は、時・処において事柄の不手際は日常茶飯事の連続であり、周囲から支えられ、生かされていることは、重々感謝していることとは裏腹に、いらぬことに気がつき過ぎ、かなわぬながら世話を焼きたがり、深く反省している。

告げ口は、罪悪と心得、口が裂けてしまい、おくびにも出さない。人格が疑われ、信頼されず、交友関係、その他諸々、支障を来たす恐れがある。これも母の訓戒である。

ジャーナリズム的な訪問客には、「触らぬ神に祟りなし」の諺を胸に、慎重な言動で対応しなければならぬ。これは私の信条である。

十数年前、曇降る寒い夕刻に買い物をしていたら、職場で同勤していた彼女と九年ぶりの再会に懐かしさ一人。歓喜に浸っていると突然、全

身に脱力感を覚え、言葉に異変が。足も動かないので、彼女の肩につかまった。店の男性二人で近くの医院へ。それから救急車で医師、看護師、そして彼女に付き添われ、現在通院している病院に搬送された。

即入院、絶対安静。一時は生命も危ぶまれたが、危機を脱し、長期入院し、その間、紆余曲折はあったが、八十路まで永らえ、拙い執筆も出来るようになり、何と有難く幸せなこ

とだろつか。心から合掌。
「一寸先は闇」は、私にある教訓と肝に銘じ、明日は無く、今「しかない。今と対話を大切にし、発音のラ行がやや困難だが、挨拶先行を継続し、大きな返事をモットーに。人の言は謙虚に受け止め、善処し、知の糧、心の糧とし、対話時の相手には誠意を持って、生きる言の葉を送って

《市民コラム募集》

感動した出来事や心温まる話など、広報やつしるに掲載するコラムを募集しています。

お気軽にご応募ください。くわしくは、広報広聴室にお問い合わせください。

申込・問合せ 企画調整課広報広聴室
33 4 1 0 1 32 2 6 6 5

市長通信

「自転車のまちづくりをめざして」

八代市は、球磨川による沖積平野と干拓でできた平坦な土地で、温暖な気候のまちです。

そのため、自転車利用率が全国でも高いほうであり、子どもから高齢者まで、通学・通勤・買い物などに自転車を利用する姿をよく目にします。

本年四月一日には、自転車歩行者専用道路「緑の回廊線」が八代駅を起点として松崎公園並びに一中北側の北部幹線までが開通しました。

さらに、平成十六年度からは、歩行空間のバリアフリー化推進事業に取り組み、安心して快適に歩いたり、自転車で走れるまちづくりを進めています。

このような中、四月三日には県サイクリング協会主催の「球磨川センチュリーライド」が開催され、九州各地から自転車愛好家約百四十人が参加し、球磨川沿いの桜を眺めながらサイクリングを楽しみました。

これからは「緑の回廊線」の延伸や歩道のバリアフリー化を推進し、日本の自転車のまちづくりをめざします。

そして、八代駅などに「レンタル自転車」を設置し、全国から観光客を誘客し、八代の自然や歴史、文化に触れ、散策できる体験交流のまちづくりにつなげたいと考えます。

中島隆利



「人口と世帯」は9ページに掲載しています。